首書

源氏物語

七

東洋文庫

○巻名以詞号之

○河 朱雀院行幸ハ紅葉の陰也此名字雖不見巻中ニ花宴ニハ紅葉賀といへりけり又目に秘説あり

○花 詞をとりて巻の名とせる也但此巻に紅葉賀とはなきぞ詞ハえくも侍りも試楽の日楽つくしけれと

賀への日やさらくしらんとあり又花宴藤のうらの巻に冷泉院の行幸の下に朱雀院の紅葉賀例のおゐるす

たりいでてとありうきこれをとり合て巻の名とせりあらのをうあすうつほの物語に神泉に紅葉賀きこし

めさへきとあり又蓬井の宮に花の賀おぼへしとあり又雪の賀と云るあり承和の御時紅葉賀たちえ

ふてるあり是また名目を例とせる也此巻にハ源氏君十七歳の十月より明年の十月までのうちをそう

○細上略 誰人の御賀とも慥に不見也賀とハ其年の満わるを賀して行末の寶算をいはふ心也天皇の御賀ハ

仁明天皇嘉祥二年三月庚辰興福寺大法師等為奉賀天皇寶算満于四十ニ云々又十月癸丑僧綱奉

皇太后遣使奉賀天皇四十寶算也凡厥山海珍味數捧既而天皇出御紫宸殿音楽逓奏歓楽終日云々

太上天皇の御賀ハ淳和天皇天長二年十一月丙申奉賀太上天皇五八之御齢云々是始也源氏十七歳の十月より

十八歳の七月までのうち也河内本ハ十月までとみえしより花鳥用て給也

○万水 春あらハ花の賀秋あらハ紅葉賀冬あらハ雪の賀といへり惣別賀とハ四十より未十にあたる時其身の

御祈祷によりたのしむ也あるとよみ詩を作れる例有之

○朱雀院の行幸ハ神無月の 河 延喜十六年三月七日辛酉行幸朱雀院法皇五十御賀 同年八月廿八日

行幸同院 詩題高風送秋 康保二年十月廿三日行幸同院 題紅葉共舟軽 朱雀院三条朱雀也是後

院也古今集朱雀院とあるハ宇多院の御事也脱屣の後此院にましまし故也

花 此朱雀院の行幸ハ宇多の御門の御賀にまうかせ給ふ也其ゆへハ延喜十六年三月七日行幸朱

雀院有法皇五十御賀云々醍醐の御門の御時朱雀院と申ハ寛平法皇の御事也五十の御

賀ハ三月の事なれとも物語に十月の紅葉の比によせてかゝれしか巻に一院と申事

あり則寛平の御門に比しまゐらする也桐壺の御在位のうちに一院崩御のよしみえさるハ寛平法皇ハ

延長の御門の前に崩し給て後かくれさせ給へ也

細 花鳥に種々説あり宇多の御門の御賀三十ケ度也朱雀院の事ハ花鳥に註せり古今の朱雀院の

女郎花合とあるも宇多院也行幸事河海康保二年十月とひかれし時節是にもとろく也

并宇多御門の御賀に比せらるゝ花鳥に委但必五十

賀とハ心うへからず又垣代四十人の数も説々不同なり

く院の御賀と心得一院朱雀院ハ三条朱雀に有とき

朱雀冷泉いづれもおりゐの御門のおはしませる院也

○ふひのるゝ 或抄 旗也

○おほく物見給はぬ 細 禁中の外なるゆへに禁中の

后宮ハ見給はさると也

○志くをたまへりて 花 御賀にハ試楽調楽などとして

舞楽の心みともありし時の試楽ハ内裏にてせさせ

給ひて藤壺女御にみせまいらせ給也

○青海波をなり 河 南宮譜云此曲ハ承和の御時大納言

良峯安世朝臣奉勅舞作此舞時依勅改成盤

渉調 弁 輪臺ハ青海波の序也いづれも舞あり

○かたてにハ 細 舞のあひて也 巴抄左ハ唐右ハこまの楽也

万水 両人してまふといへり是やもし同しくしてまふと也

○花のかたはらの深山木也 花 うつくしき花のかたはらの

ときハ木のやうに見ゆると也とき〻ハ仲忠大将を花にたとへ

仁寿殿の女御の弾正宮をときハ木にたとへていへる也

細 花鳥にうつほをひきあり此頭中将もまゐりてハ

朱雀院の行幸ハ神無月の十日
あまりなり。世のつねならずおもしろ
かるべきたびのことなりければ。
御かたがた物見給はぬことを口
おしがり給ふ。うへもふぢつぼの見給
はざらんをあかずおぼさるれば。
試楽を御前にてせさせ給ふ。
源氏の中将ハ青海波をぞ舞
給ひける。かたてにハ大殿の頭中将。
かたちようゐ人にことなるを。立
ならびてハ花のかたはらの深山
木なり。入がたの日かげさやかに

ゐをれとを添氏よ立まりつてハ也又山ゐたをし
ろき心あり

○たゐまひのゐ物と 万水ゐ中ゐよ納てたをそら
とゐろゐや 盃ゐりちハ顔持也

○忘いるとゐ物ゐろハ 巴狩 舞の中よ詠吟れる也
細青海波の詠也 河詠小野篁朝臣作 桂殿迎初歳
桐棲暦早年 煎花梅樹下 蝶鶯盈梁過
○佛のれゐをゐひんれ 河聖主天中天伽陵頻伽声 決定経
文句 伽陵頻伽在卵声勝衆鳥
巴狩 佛のとをきゐ奇妙也天上のゐゐも佛世界のハ勝
ゐとゐ一重ゐをゐ

○まちとゐゐ 或狩 詠曲のゐハ音樂をやゐゐ也
○ゐのゐゐあひ 万水 樂の時詠曲ゐ物ゐのをと
あゐゐゐゐのゐをといゐ

さゐちよゐぐのこゐまゐり物ゐ
おりゐさゐどよおゐすゐまひ
のゐゐぐをおりちよふゐんこゐ
さ海ゐり詠ゐどゐ物ゐハこを
や仏の御迦陵頻伽のこゐゐんを
ゆゐゐおりゐあこれゐちよ
んゐどゐをぐおゐ物ふを華戸
んこちゐをゐ物ゐ物ゐ
詠をゐ神ちゐを物ゐ
よまちゐゐがゐのゐをし
をよゐのらゐあひまゐて
つ物ゐわゐひゐゐと人を物ゐ

○糸宮乃女房 細 弘徽殿女御也
○ゐる〳〵す 或狩 添氏のをれ物ゐるゐつをてゐよて
ゐひ物也
○物ゐと空よ 河 大鏡云 い尺〳〵ゐ物ゐしてゐハやゐ
て同君処喜の大野れ行業よとゐの小物れ保ゐの
れゐの親王れ七歳ゐて舞ゐを物ゐりしてゐゐ乃
ゐをゐる物ゐう万人ちゐれゐ人ハ物ゐをゐゐき
れ敢のひゐやゐゐゐゐくゐてゐ物ひゐゐ山神め
てゐとゐゐゐよき
○ゐゐてゆゐしと 細 弘徽殿の女御也忍よハいゐゐる山
神ゐをとゐゐゐゐゐれゐゐの心也
○ゐつゐハゐゐゐゐゐ心 細ゐの心ゐを物ゐゐゐゐ
ゐゐとれゐゐ也

○又やハやゐて 細宮ハゐつゐ也
巴狩ゐのゐゐよゐゐゐを也
○ゐよの試樂ハ万水 天子の御羽也添氏れれ舞ゐて
ゐゐ人ゐのゐゐゐとの物也

ゐゐよの御ぐゐゐて物ゐゐ
ゐゐをゐ物ぐゐゐゐおゐゐて
神ゐゐどゐゐよゐぐゐゐゐ
ゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐ
ゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐ
ゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐ
ゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐ
ゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐ
ゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐ
ゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐ
ゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐ
ゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐ
ゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐ
ゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐ
ゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐ
ゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐ
ゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐ
ゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐ

○あいなくれいの人細芳つぼの内心れ鬼よりの人よろこばせる也

○ことよせりつと細殊なることも

○うてしきしうは万水頭中将ことの外よいちうはもとなめられる羽也

○家のよは河良家子也若紫の巻より朱雀院れ行幸あるべしとて舞人すくやむしろるき紅のようとことあり紫花物語才七をいきり略之

巴拭樂の家よりれつきうる人れ心也

○ここしう河古めりき心也或巨ミ玉篇云巨大也どもたりへ大人の形也ひさあるやうなる心也

○心天の日〳〵盃試の料つてはい也或拭樂也

○ことんちのうをや或拭紅葉の賀れ日のうも也

○乃世ちん乃盃勅定也芳蓋と内家也の家天ふうう

○ことめて中将の君細翌日早朝よ源氏よりうち蓋への消息也

○世よもつぬ或拭芳蓋への和ひは世よあるもしきかと也うのスてうしらうまひ源ひしを芳蓋のりんまるゆんとひてと也

○和ひよの源氏也細源氏の我れれるハ和ひは立まへき作法をなりしをれまへよ天せちゆせ源へきたりとあるゆへ涯分れかと舞の手をとつてゆ也さやうの心て神ナりしと知源ハなりと也

○あなうしと万水芳蓋とうやまひ源羽也

或拭ありをそれやと云心の羽也

○めしあやなりし花あやハ文也錦をとの文を目よスろとくうろうき心也細平生ハたまさうの内返るをなりしよ今日ハ返のあるハ昨日れ舞をたらひすくなしろく思ひ故よてでとまるの地の羽也

○うへ人乃ゆ芳蓋也花青海波ハ盤渉調唐の樂也うへ人の神うとうん源へ相違なりうへし細をうとしのうハ通るうるなれハたりうきしきの人れ源氏乃舞源あり夜類うく長よりとれうきうりしうら也

○大うきよハ細大きよハ知りしめきわ也河海の沒いう

○源氏の心

えん源へ心とあて中将のきみ源氏

はうんじうんふきうぬ月ぐり

心ちみぐうそ

おおりみようきまみぐくもわぬ

月の神ちうしうろうきあ

あふうことあるう陽色あもあ

ありしはうちようう源ひ

世ぐれどや有まん

かうへ人の神つるとうをれ

うるりつあてあうれうふき

あるうよりとあるをうぐう

るうあづうしうやうのうきへ

○やうのくさぐさ 細 此樂ハ唐の樂ととく分別ハ
とり也 誠よ后ゐを立給へき下ちと源氏の品也
○人のたうとまて 細 唐と云也
○后とく 細 后の下地也 乖后なるれいく上也
○持經のやうよ 或抄 持佛持經といひて不斷手
ゐ〻經のやうよと也

○行幸よハ 細 是より行幸の當日也

○東宮と花〻まと花 延喜十六年の三月九日賀に
作布て令奏皇太子 此時太子ハ保明太子也
孟 春宮ハ朱雀院也
○とろこ〻こまと 河 唐花 高麗花
○くさたかう 細 種々多き也
○ひとひの源氏乃 細 まゑよ神をと宣よめてつ
きとあり也其故よ誦經さを祈禱せさを給也

たどくしくゝるぶ人のゐんを
おりかゝやまつる所きさきこと
のりねてとかゝるまもて
のやうよひろげてんゐ人り
りまゑんをこちかどよん
のうゐんをくつゝまつりて
まゝもおとゝまゝ例のく
の舞どもうだめづりてかうゝ
海とつゝゐ舞どもをさ
おかりぐのこゑつぐのを
世をひぐるひとひの源氏の
はゆゝげゆゝゐがきれて

○春宮の舞ハ 細 弘徽殿ハ人をゝとと見ひ
給へ也
○くゝろ 乖地下堂上相交也
巴抄 紫束をゝあたもとをくさんたりよ鳥甲を
きて立をゝひゐる也其仁躰とさえゝひ給へり
○くゝろく 河 右葵也華族の事也又云有職
或抄 まゝをとのゝる也其職ゐ蓮ゝ人と云り
○宰相ゝう 細 系圖誰とをゝ奉行とゝ人蓮也
河 海宰相よ任ゝゐ始の事と出せり略て
或抄 此樂の奉行或說四人ゝゝ不可然宰相ゝ
衛門と兼官とゝゝう但ゝゐて
不可正事也

○とのくゝゐりて 細 此かゝの稽古也
○こたゝ紀氣の 花是ゝゝハ賀の日ゐとゝ也

ゐどゝ給おどゝゐぐよ世をを給
をゝとうとあゝれりゆゆゐ
よゝゐゝの舞ハあゐぐゐなを
とゝくゐをゝうゝゐ垣代
なゝゝ地下もゐゝゐ
とせ人よおとゝれゐゐゝく
のゝゐりゝのゝ人を給て宴
ゝうゝ陪の考宮中考ひぐう
ゝのゝくのゝをゝをゝゐ
ゐゝどもるどよゐるゝてゐゐ
をゝうゝをのくゝゐりゐて
ゐんゝゐひゐゝゐゝ給

○四十人のかいしろ　河　長秋卿笛譜云四十人之内序二人破二人垣代三十六人云々　細四十人の垣代とかく人数切てひとかたまりとなる也四十人か皆もろく吹そへてあるてハあるまじき也
○まことの深山おろし　花　朱雀院にハ池山ある所也

○青海波の　或抄　源氏の舞給ふ也
○おそろしきまて　或抄　身のけもよたつる心也
○かさしの紅葉　花　舞人かさしにハ誠の立木の枝ををりてつかふ花とも紅葉ともさま〳〵にをかきるとあれハ是ハまことの紅葉ときこえ侍り
○ちりすきて　巴抄　散透て也
○菊をおりて　河　菊挿頭事例多之略之
○左大将　細　系圖に見えす

のかげに四十人のかいしろいひ
しらずふきたてたる物のねども
にあひたる松風まことのみやま
おろしときこえて吹まよひ色
いろにちりかふ木のはの中より
青海波のかゝやき出たるさま
いとおそろしきまで見ゆかざし
の紅葉いたうちりすきてかほの
にほひにけおされたる心ちすれ
ば御まへなる菊をおりて左大将
さしかへ給ふ日くれかゝるほどに
けしきばかりうちしぐれて空

○空のけしきさへ　或抄　此時しぐれたるに空のけしきハ此舞を感したるやうなると也
○そゞろさむきハ又なき　細　試楽より又一段おもしろき也
○入あや　河　舞有綾取手故云入綾　花後頼音云　時鳥二村山をたつね見ん入あやの声やそしくまいるかと　頭昭註云舞ト入あやとて舞のおはりに又舞て入也　時鳥の入あやの声やまさるとよめる也云々　若菜巻上云　柏木右衛門督らうそんの入あやをすこしまひて六条院の御賀の事也
○物見しるまじき　細　なにもしらぬ下部語也
○承香殿のおはらの　巴抄　それよりすこし御子ハ朱雀の御門の御子也
○秋風楽　河　秋風楽　盤渉調
○さしつきの見物　或抄　源氏頭中将なとにつきてハ此御子の舞見物と也此外にハ目うつりしと也

のけしきさへ見しりがほなるに
さるいみじきすがたに菊の
いろ〳〵うつろひえならぬをかざし
てけふハまたなき手をつくしたる
入あやのほどぞそゞろさむく此世の
こともおぼえず物見しるまじき
しもびとなどの木のもと岩隠
山の木のはにうづもれたるさへ
すこし物の心しるはなみだおとし
けり承香殿の御はらの四の
みこまだわらはにて秋風楽
まひ給へるなんさしつぎの見物

○ろうてハとゝ　細わらうの面白き故なりてハ真をさしつゝ也世俗よろこ

○うの夜源氏の中将　花　延喜御記云貞観已来奉賀時有叙位之例　巴撫　従五位正下　細叙正四位下也　巴撫　加階也

○正下けかい　細叙正四位下也　巴撫　加階也

○ようこひ　或撫　官位とゝ又その慶賀也

○ゝ君よひろうて　細源氏君よひろうて各昇進

○ひろう乃世　細源氏の栄世ゆゝしき也

○宮ハうれろ　細藤壺の宮也もゝそハまゝんてとゝむ

○ひ　巴撫　細懐妊ゆへ退出ゝ

○うかひあり　万水　若紫をとうひ故也

孟　とゝそハ役うゝ也

○大とのよハ　細葵上の御方也

○さハうゝ　或撫　人よろうさゝ　せうゝ也人口

○ようろうす也　一説さわぐ

○の若草　或撫　紫姫君のゝ也

○二条院よハ　細紫上のくかうろう

人とハ葵上方よハ　ろうさうろう也

○いと心つきるゝと　孟葵上の心也

○うちくの　巴撫　ものさるひとハ不知也

○きいのくのやうよ　乗　匿悪友其人ならゝ

ゝと也　細葵上の性とゝ也ちとけとをさゝや

うゝ平生れ有さゝれあるもさやうよふうく徒

人よ分ろ心もあるうゝきもとゝ也

万水　葵上の常れ人乃やうよ恨すゝ心あゝの

恨てゝれよ我をすゝむ人きと恨をしうゝや

うゝすゝてきとうゝと人ゝ人ハあゝぬねゝと心ろ

ゝと也

○人のためあり宿の　細　葵上の事をいひてける
との宿也
○あやみと　或抄　是くひとつ不足すると云うすき
らし也
○人かたさきは　細　かたみのおりの時よりの初
しらうつきたとゆきそでておき地とと也
○忍とも思り宿に　細　つみにはおもふより宿人含と
そそとひしよ也
○おもくくろし　巴抄　葵上の御心おもくし有
ゆへあるのまゝてしたらひすると也
孟　大やうにおもくつきゝたる心をいふむと也
○あさるゝきく　細　是より紫上の事也
○又人ついは　万水　紫上の源氏と御いんしるわする
と見くの宿とハいつり常ににつくる也

きさきひとしも出らるべし。
人のためありき御めぐみふかきの
よのおぼえとがめゆるさずも
すし。人かたさきは入れそめて
なおもくれなやむとなきかぶ
とひはゆゆからうとも事
のうねどこそあはれつね宿
御おもどもねんとおぼえく
ろぐしのいはゆろの宿と、
とのづくしたのまる、かくる
こなりくりおぼさるきんへうは
のをまさへのこそうつ宿（紫上のことなり）

○むつましきとり　或抄　源氏だにかれあまたき
宿也　纏也いまだあさるゝさき也
○ふるさとるれふたい　万水　西の対にても行ほき
とふるなるべし
○よろ浅の心と　巴抄　琴も下心にてあり
○て外なりきる　巴抄　我むかしよりそれにまきし
をよりひとりきりやうなと也
○まん所まいし　河　政所　家司
万水　政所ハ惣而万事の所用をつかさどる所也家
司ハ入立てこまかなることをつかさどる也
ことにまうらてとハ別而そのすみ心ありとなり
と思きつりまつりしと也

かくかよそてすみ心りふかくむつまし
まとりてゆする宿えぞしよのの内
のんもこれと思てむでもと
おぼしてなとうるれさきさい
よれきつひとふかくしてこれ（源氏也）
ももあるとつあつてよろづの
御さかももとへゆすみて（手本）なん
くまてるすきたなぐしつれそく
わりなきけるうれしとかとさへ
ぐんやうなあはれさるかん
所けいしるこどうぐらこそ了
まうらてころかりとなるでず

○惟光より外の人ハ 細 世外にはしる人なきと也
○かの父宮も 細 兵部卿宮也
○あま君を 或抄 北山にてなくなりし祖母の尼君也
○君のおはするほどは 万水 源氏のおはしてまぎらはし給はぬ時也
○こゝかしこの 万水 葵上御息所なとあまたありて 或抄 源氏のかよひ所おほくていとまなき也
○二三日内に 或抄 源氏の禁中又ハ葵上の方におはしますときはくつし給ふ也

つかうまつらせ給ふ。これみつより外
の人はおぼつかなくのみおもひきこえ
たり。かのちゝ宮もえしりきこえ
給はざりけり。姫君は猶時々
おもひ出給ふときは尼君を
こひ給ふ。君
のおはするほどはまぎらはし給を
よるなどはときどきこそとまり
給へ。こゝかしこの御いとまなくて
くるればいで給ふをしたひ給ふ折
あるをいとらうたくおもひ給ふ（源氏心）
ならず給ふ。二三日内にさぶらひ

○くつしなどし給へば 河 若 万水 くつしとすみて可讀 或抄 屈 氣のふさがる心也
○母なき子 孟 母のなき子を持たる父のやうにと也
○ありきもしづ心なく 或抄 思ひありきもすゝまず出給ひてと心ぐるしくおぼす也
○僧都はかくなんと 細 源氏のかく大切にし給ふを僧都は心やすく思ひしと也
○あやしきものから 巴抄 幼稚なる事と也
○その御法事 細 紫上の祖母の法事也
○御ありさまも 細 源氏外家むきにて参給也
○命婦中納言 細 二人の名也

大殿にもおはするをりは、いと
いたくくつしなどし給へば、心ぐるしくて
ははなき子もたらんこゝち
してありきもしづこゝろなくおぼえ
給ふ。僧都はかくなんときゝ給ひて
あやしきものからうれしとなん
おぼしける。その御法事などにも
給ふにもいかめしうとぶらひきこえ
給へり。藤つぼのまかで給へる三条
のみやに御ありさまもゆかしう
てまゐり給へれば命婦中納言
の君中務などやうの人々

○もとやふし　或抄　源氏を外戚よりあひ〳〵ひかれをうめく也

○吾ろ〻文　細　藤垂の兄中紫上れ文也

○この君　細　源氏也　盃　源氏のまうちとあれハ兵部〻宮の対面有〳〵と也

○いとうしあるる　或抄　吾ろ〻文の戚をいう

○女ゑて　或抄　源氏の心也　吾ろ〻文を女あるすて尺〻やと思ふ也　文の戚源氏れ我ガを女と成てと也

○うゝ〻むつまし〻　万水　藤垂紫君れ仕るゝと下より思ひ給へ入るゝ〻きれ心のある也

○尺やと　或抄　吾ろ〻文と入るやうと思ふ也

そいかんしうもどやふしてなりかるとやとうぐはおりへど。
うづりてはかるこの即物ぐうすれはぐよ。吾ろのえ戚
ゆうどの戚おくもとこさめて
さいかんしゆうぐしうわろ
きゆていろうしうおもひ
ゆるをはそえんハおうし
うめぐ〻ん文れど尺〻やろ
ゆもぐ〻むつまし〻おぼし
ゆてこまやうよ物源氏ぐはえ
ゆふやもこの源氏のうも
ゆさ戚の吾ろう

○むこうとハ　細　紫と女成て源氏よむひうきと也　紫上のうへをてもいひうゆ給へ也
巴抄　源氏を女うて尺〻やと也女うての栄
よ作てうゝわう

○くれのきハ尺ろの　細　吾ろ〻宮簾中よ入給也

○むうハえの　或抄　門の源氏を大切よ思ひて
花垂の四方〻れとゝまうう給てハ簾中よ入給て
直よ物をの給ふと也

○つゝ〻ゆう　或抄　唯今うゝ〻きとそう
りゝ思給へうるき心と思ひ給へ給也

○ちゝ〻と　万水　源氏の れ行也さいゝうまつんれ
とをさうゝうを行れハをこう給へと也さうへき
れ用ゆとあハたりせをれよと今はよたかせを
きて出給也

てゝようゝうゝうゝうゝ給へ給
をいとめでうゝとんもうゆて。
むこうとうでいおゆゝもでおて
尺でやゝいろめさうゆうろ
よハおりかをうきあまバ子
のうゝよいうゆをうゝやまく。
むゝいうへのゆりてすふいとを
ゝへんづくるでりのをを
ゆえゆひをこうゆうゝを
給へるもけゝくおはゆうでひう
ゆうやゝ尺ゆうもさうゆべくれ
じでうもゆうめはゆがを。

○まくしう 河 儀也 もとより同事也
○令婦ハ 或抄 已下令婦心也
○宮乃御まへさき 孟 冷泉也
○ありしよりハいとゞ 或抄 御懐妊已後源氏のあまりしき心ばへをうきすさみ思ひわびしきと也
○うきのちも 或抄 令婦も何とぞして源氏にわたいめんありやうに思へとも何のかひもなきと也
○こゝろもちあまりやと 万水 源氏と令婦とつきせず思ふと也 巴抄 双子也と心得てよくへきこと
○少納言ハ 細 又是より紫上のことを云也 やうよ源氏の大切にし給ふことを思ふ

そのつゐでとゝりゆくとゞまらく
さてしはすには御せうともたまはん
それもいとしくおぼすぐさで
いそぎ給ふ令婦もたびたびかよはん
かへるかくごやの御そでさもなく
しよりハいとゞうきふかくおぼし
ひとそてこゝろうけれ御そでこき
もまづいうてしおしはかれぞ。
まことのあはれしまさりてをめく。
よるのちぎりやしおぼし
あはれとてくらまつきせでど。
少納言ハおぼしどおほしきなど
（少納言心）

万水 松しハ思ふ人まがせることもなくもさて今のやうなを心よからて思へり
○けふなんぞ 或抄 紫上の事を祖母尼公佛事ありしいのりなされしも也
○あかいもの 細 葵上也
○こゝかこわき 細 六条御息所の事也
万水 御息所まつむ其外源氏乃御心をさき給へくのる也此条已上少納言の心なるへし
○ひゝなあそびも 細 紫上成人ありてハむつまじき事あるへきと也
○されとも 或抄 源氏の別而大切にし給ふを見てはいふましきことをなのめきと也
○御ぶく母方ハ 河 服忌令曰 祖父祖母父方ハ服五月 母方ハ暇廿日 服三月 細 花鳥ニ除服十一月晦日とありいるハ九月よりかぞへてハ十二月に可及然者十二月晦日の返

あらたまのとしもこゝろまさへ乃
この御まをおぼして御おこなひ
こもいかゞしたまひ佛乃
御まへしもやとおぼ也。かいふの
いとやむこともなくておぼつかなう
こあまるうつゝひたまふぞ御まよ
おさなびたまんなどのいむつまし
おしてもやとおほしかされど
かくうちおもひなるおぼ
えのほどはいとなのめげなう
しかつてもしるきハ三月とそハ
とて御ごりのハあまた給ふ

未ヨ男君ハ朝拜ヨ系図とあり十二月可然

○又あやしうして　花麥　細紫上ハ母上よりくやえ
うれ給て悪皆祖母の養育をそなたう給ふ
一限と眼とし給へ着し給へきりを源氏の品い
給也河海説如何

○まいりゆき文よハ　花上略　紅薄色紫とのうきて
まくゆさ色といふをとゝきうれハ紅梅萠黄
柳葉其外梅樹をとゝあうきみとゝへきうや

○ぢのうきり　巴撥　紋不見心也

○男君ハ朝拜ヨ　花　年うりて源氏十八歳ヨ成
給へ朝拜ハ正月朔日の小和拜を云朝賀ハ
あるも　年正月朔日の小朝拜清涼殿の前庭ヨ
諸臣拜ニ

○もうりハ　或撥　紫上年一つもり給へハ也

○うち　源氏　細　源氏也

○ひいるを　或撥　紫上のひいるあそひ也

○うくき　河　楚く起　うくり也

巴撥　あうう方ようし

○三尺のはし　或撥　ひいるのはし厨子也ひとうろひい
一具也一うり心也ひちさき屋ひいるの殿也

○ふせきうて　或撥　あうしもせうきはうひうを給
しうる也

○なやらえとて　細　紫上詞也いるの追儺也
河海委　異朝古事數多あり本朝ハ文武天皇
慶雲元甲辰年十二月此年天下諸国疫疾百姓
多死始作土牛始追大儺　除夜ヨ儺を追ふ也
鬼やらひとゝも也始自禁中至諸家

○いあきう　或撥　紫上の月ハ大公也いあきう除夜ニ
鬼やひをもうしているの屋をとうちうし也

○きみハといへうて　細　正月朔日うれハ也

○いとあせきを　或撥　源氏の小供数多うをとゝり
万水源氏大内へ入まうり給也

ぎうひとうひよしかぐ
たうしひすへてみちいさを
どもはうあけてをうはく
あををあ白はまであをびう
ぎはうあらみていこさが
をこぶちはうあれはは
うひはうぶていとを事とおぶ
いうはいこうるをとの氏也
しうざるもはうかい屋はうう
を白をでんをふこしうて
あいあひうをいぞを白ふ
ふいをうるを白はをへぐうよ

○ひいなの中乃 万水 源氏の内裏へまゐりなまでといひおよそし給ふ也
○□しふ 或抄 主上へ少納言の教訓と申也 そびやかさするなど、まだいとけなく成給へと之
○ひゐなあそびハ又仍 或抄 あまりひいなあそびよそより心をいれ給ふ人に少納言などやうに申ける末の詞にあるハ也
○たゞあやうさそ 或抄 狎るゝやうにして源氏にみえ給へと之 はづかしきほどとも侍べるとあらまほしき也と之
○ゆめあらひなれぬべき 或抄 少納言の教訓の註とこそ

いでくみんなまゐりハ姫君もいかでと
みんなまゐりなで ひゐなの中の源氏
の宮みほとりひとへて内小弁
せかでし給こしんにとらて（少納言詞）
おとなびさせ給へと申ままに
あそんハひゐなあそびハいかん
ちぞり給とかく御ちかくこそあそど
ましていまゝでなりなべ
かくしあやうくてこそみえ
なまゐり給ても御なく
どこにもうく世をもなさど。
か納言さへそれあそびにの

○ほとくの 或抄 うつくしくて女房なくとも男の有ともあるべしそれハ其にてなきと也
○今うなり 或抄 主上の心にハ源氏をあやのやうによそ見ひとつる也 少納言申あそび給ふと也
○さハいへと御年の 巴抄 双地おとなしくなり給ふ花やしと也 或抄 ひゐなあそびに心をいれなし給てあさなさとハいへると也
○くあさなきふきそひ 細 ありやうにあさなきとハ人ハそしりあるハさる也
○その内の人々も 或抄 源氏御内の人々もいまさそれともちゐる也

こゝろぎぬへきとバちゝりしと
おなじ世そてまうんくてんぞ。
こゝろのうちに紙（主上心）さはかたと
まうけてぐりのひとくの男
とてあるはみえてこそあまた。
うちはくおりげにうちなん（源氏の事之）
をものうけなどい海ぐ
おぼしまりけるぞけふ御年
のかずそふしるしあるかにぐ
おさなきはけにひのことはづき
てしられバどのうちの人
人もあやしとおもひきこへて。

○いとかうなみに　或抄　世のつねならぬ心と
おもひすぐしとハ思はぬ也
○内よりも大とのに　或抄　禁中よりまつ左大臣
殿へまかり給て葵上に御対面也
○きいるかたなく　細　葵上の事也二条院の人も
なく下心よりを給ふ也
巴抄　外家のおもしき所也
○心こしらへて　或抄　世の常にもてなす事也今
までの心をあらためてうちとけ給へる也
○またき人まへて　細　二条院よりまへてとき給ふ
きこえあつかふるをとかく見給也
○やんごとなき御方　或抄　二条院の人と源氏の大
切に給ハ大方ならずと歴ことしくそれに給へん
と思給ふ也

いたうまづつけたまひあつかふ
んとおぼしめしたるにわたらせ
あまりまうで給ふ例のうつし
うるはしきことゝさへ給ふてん
うちとけたまへすかなりおくる
しうれば心よりもうちとけにくし
よそよそしくおはしますためにをかし
見しばいかようまつる人どもの
心しぬつゝもきこえ人をとて
くづさぬことをなしまいらせ
やむごとなきおぼしきことかな
こゝろえてこゝろのそれ

源氏詞　葵上心

○なかさうくし　万水　こゝとくへもてうつきよき
らうこてまてハ草子の批判なるへし
○あやて見たるにまる　万水　葵上下心ありて心よ
くおはしきと源氏のおもひとおかるとそすり
給ふ也
○かくれなきかたなきをひ　或抄　源氏の方よりそこを
給てたのみなるとの給ゆへさまの心よからて
返答なきとし給也
○なをさ人よりハ　或抄　葵上のおりおは世上の人よ
まさりておもふへきと也
○よとせハうらう　万水　源氏十八歳葵上廿二也
○うちとし　孟　葵上ハ源氏より四の姉なれハうち
とけと也
○何事なくハ　細　おもはぬハ不足也
或抄　何するをも不足なるなきと也
○まろ心のあまり　或抄　源氏の我なくて思ひ給
我あまりしきゆへに葵上の返心あるよと也

てびらうとくゆくしくおもへ
さらでしのびてかんちかやう
よりそひてかんぶれなきひ
見ハえもいふにかゝづらは
いとふかうえすなるかなるを
人よりハいとこよなうちよ
ぜうりごとのうるにおもしろければ
うちとしもてずとにさうか
ようのかゝでとりかんと給などか
ふこの人のあるぬこころは抱し
おかいとこころのあさうらし
くわすきびよからうとされ

源氏心

○花の大たと　細　草子の地也

○ふやうよ　細　當帝のふれの也

○はしたなく　或抜　菱上のはしたなく母とも思ひきこえ
まいらせハ心ばせのうしろめたく我とハ源氏をハ
地きく有へきなと思ひよそをさいはなかりなり

○男君ハるとり　細　源氏ハ行とも思ひよる也

○あるくひ　或抜　万水いと菱上のはしたなく我ハ思ひ
思ひとしてあるひ思ひ思ひとあるくひ
思ひとハいと世をうしと源氏の心もとの批判の
詞なり

○ものしく　細　菱上の又ものしく也
或抜　菱上よ世をうしのあさきゆへ
思ひ人也

○ふやうなりとき　細　うちむかひたてまつり
ものしとも思ひ也

なりとうしとおもひ　たてまつる
おもひおとしやすゆるもの
おもひやもしてをくおこすもの
やうよひとういつきづき
思ひうるおもひいてこうをく
てをうもとうあるとをもざ
まとやりひやすをつとをやと
ぎみおもひとをもとる
ちいをふ思ひうのつどもと
やうもおもひなり
げるを思ひうとをとをとと
やりひきこをおもひ人をまり

○ものとうきにハ　細　うちむかひたてまつり
二日の朝ものを思ひをものをを思ひ也

○ものをきにあひ　細　石のあひ也
花　うかの地絵云　人世をあるをくてをうもの
あひあひもあるのをよりとはなをとを取
虫をを思ひて大将よ色と朔日よ拝をあんあり
ものををれをを思ひ　今案むりの名ある玉の帝
よハ落花　取雲通天をを名ある地あり也

○ものとをふハう　或抜　左大臣ハ源氏とうつ
きの思ひをとのつ

○色ハ内宴ある　弄　正三月中よ清涼殿をを文
人をうて詩をうを講せをうあり主上并抱
柄赤色袍を着　保元よ信西ハ物をるひ　後ハ
絶をうる也　細　源氏今るのたりよハ色分をり
とて斟酌ある也

ものとをふハう　左大臣ハ源氏
をれいまをれるもの思ひをを

○見ひて目をれぬ　万水見ハめつらしき事くとそ
たのてきせ給を葵上と思給心也

○たまさかそとも　細源氏とハかりうめるるれ
ひこるといひてりそくやさてハと也

○さんさ　河　条座　条賀のる也

○内東宮一院　河内　相撲内　春宮　朱雀院
一院　相撲内のそる款准寛平法皇
花山一院ハ寛平法皇か可准或又陽成院とも
いきうや　弄　先帝とハ桐壺帝と尺ふ
いく
○まよハ　とるを或拾　年ひとつ　ひとつ　ひとつ
今ハ又　ものて尺ふ　ふと也　孟源氏の姿也

ぐるれなさ夜られいるん
そ〻みてさをもをうふ
げよろづかうづさをそ
尺をまうふよいをうひと
らぬさうみてもうらんを
いづ〻いるとてんよまをす
わづ〻とんしふくさんざ〻
よそてもおまをとうるもあり
さふをぐうちをえ　みん
ぐうりをそてハ　をうづのうを
やかづまうふふうふ
みとうもんてあうかはびふ

○くめてきこゆると　万水　芳亜の母君ちう
源氏よめそうる也

○はゆるの花芳亜出産のる也　去年三月より芳つか
出里居ふて源氏君ひふ三月ハ十二月
まとハ四月ようるるへしとうをハ正月ようれ
ととうちこうるかとる二月十余日より産ハ
あうふ也
万水月のひゆくよ密通のるあるとうんとそ
宮と源氏とるをさふとうる也
○ようるて立ん　或拾十二月　あう月ようるを
るをれハ正月ハをうとうをひふよ正月をうち
うる也天子のにるるれハ三月ようる
○和のをうやと　或拾　和の氣のうひをりて出産
のうるうやと世上よりる也

まうよゆ〻しをまでるうふう
ふふりうる源うるとんで〻
をてゆるをこやハ源をての
ひまううなるふうよつをて
もおりかをとをこをるうう
この源をしのをうをもをこを
ようこうるうのをうをもをこ
芳亜の宮ハ〻也
ハをうをうをこやんもはをえ
内をもをうふをうをうんひを
あるようをるをてうをうふ
ものをうやと世人のをこを
をこををやをうをうをひふ

○月のつさつよ　花後撰　長とし卍（き）人ハ花をわすれて月をはなつよすぬ（きぶ）

○中将の君ハ　細源氏也　時の折とも　浮雲巻　万水源氏　寄このすれいとれとハなくて内これ形殺出氣ともなて　源也

○せ中乃　細　藤壺の御心ずうしし

○うくくるすてや　或抄　御産とすてうせやせん　とうきさ　源也

○二月の十余日　弄　一月こえ　万也

○花をこ尺こせれ　万水　冷泉院の御ゐ也

○ずうすく　或抄　此乃　種こ心りとうく　見ひろ　名残とやく　天ゐまて　又苔つ乃　御内衆　よ　ろこひ　源也

てとよう月のいづつよりゆづこと　おがくるぎくる
はとろもいてとるてくてるや
こればねのこみいてぐおりひ
あとをてくすれうあどさや
いるてとろづくよさを
世中のこぐろきよつあても
かくとるかくてやをこるんと
とうあつてるげきれよ二月
の十四あまりのなどよおとこ
人こせきれるまびあどりかく
うちよもやんもとろびて

○余なりくとと　細　苔壺の御心也　しつ并てよいう
ゐもるくてやとハおりせと　弘徽殿の御ゐくこよう
時何とも源氏　うるて見源へきを　口初くと
源ひへよ見ひつりていふもてなくくうへきう
を見ひ源也

○うきをりまよ　河　咒咀　のろひる也

○さくやい　孟　心のさくやく也

○人のいつくく　或抄　此ことをくやくいんし
くさとの御心也

○の人ちをぬ　細　源氏也

○人ちよまつり　或抄　人ちくるる附今苔壺
の御ゐく人源氏まつり源也

○人のおりつるる　或抄　源氏のまう乃源
くさとハ花りせれるくさよ天ゐのくやく
乃ゐるつせくを見ちゐ源氏のまう乃源て其
御抄并を奏ーー源くんとく

ちよ　花いのちかくくりとやりか
をいくくつうれど　弘徽殿な
どのうけりげよのこ母ふとや
くをもかくくこくかくーー源ハ
まくくバ人ちくつをこまやと云
くつりてるんやりくすく
づきハやいおくく人乃いうこと
ゆくぎふおがくくとこるは
の人ちをはんよもいこうん
りとかくて人まくまつりおく
源氏羽
う人乃おがつるかがりなえを見
をぎづこをてそくしはんとち

○むつかしきるかとを或拙 赤子のかとをいふと
あり　ありて乃世話なる也
○とりつく或拙 地ちう也 万水源氏より乃世話
なる也
○さらはいと 万水 さるかとをよる心也
○うしとう 細源氏より似話也
○文の中心乃鬼 花心の鬼とハ人よりそろしく見
る也 謙徳公集 我たのもうしときもそきのつ
くるよりハ心の鬼と乃たくらう
世拙 ものよきをわれい也
○あやしうつる 万水 源氏より密通のるをとをと
をあやしく見ひとりあやしと也 やハ也 茨垂乃
詠心也
○とるるさるとふ 或拙 いさうのるてて
きて出てあり　茨よりひるるとるうき世乃
るしい也
○いるるる名のつ弁より 或拙 るきるるとをさいてよ
こをとハ虚るとをいとれねハつ弁より名のてん
と拙ものをうく見話也

○令婦の君より 細 源氏のひ話て也
○いづくきてをと 或拙 さなく羽をつて話をと
ひとうと也 たいめんのくきやるるる也
○今とのつゝ 細 中(中まのれ)は乃(乃)きう也
○見へるをき 万水 源氏と令婦り間のる也
○さつてきるる 万水 源氏の我中ると令拙
るをえの話ひ出話ハの也
○人つてるて 万水 源氏の茨垂(人つてる)
てきてこきる也

令拙のきみよたまきうよあひ話て
いづくきてをとをとにてるへど
るのうひあづきよもあるば わ
やれ御事をとうあくおびつる
うまえるへ(令拙羽)ばかりどうしもあ
ぐらよの話りとん今をのづる
るんをを世話てんとやのえあぐ
見へるをきうきるるるるど
かうていさ事るればまかみも
えの話をでいるるんよふんづて
あるでやえををんとておいる
きまるでんぐるき

○いとなよ竹の　源氏也　細行くへしらぬ琴りそと也
この世ゝよりせてゝ
巴撥　まゆみ　又なくてゝあり中と也

○うるはしてゝ　或撥　世上よりはあり琴りハ一かか
むつまゝきるゝいるゝよ　我琴りハ何とゝ心えう
しづきとゝ

○宮のおとゝ　巴撥　源氏と共てゝるゝもおかめ
ゝと也　あくゝしくゝ　ちてゝ　名のゝてん　心ゝ
ゝ

○えゝたるゝし　細さとうさゝるゝてゝ
あひゝハさう也

○人てゝ　五の　令婦也　細　とう宮の御事也
人ゝとゝハ　友垂也　又ねりゝとハ源氏也
人のおやゝ　心ハや又よあゝねゝとゝを見通よゝ
ひあうゝか

○心ゆゝひうゝ　河　無心後
或撥　心のゆゝまゝるゝゝ　琴りと令婦うと也

○うゝ　ゝいやう　細源氏也　やゝとゝとゝ切へし

いとなよ竹よむゝむとゝべゝちぢり
てこのゝふかゝる中のゝゝてゝ
かゝる事てゝゝゝえゝゝゝれと
のゝ令婦ゝゝゝゝえゝゝゝゝ
ゝれゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
よゝえゝりゝゝゝゝゝゝゝゝ
えゝど

人てもおりゝゝねゝゝいふ歌
ゝんゝやゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝれゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

○人のおゝひを　細　友垂の心也

○令婦をもひゝ　細　源氏のゝるゝゝ　令婦を
とゝとゝ人ゝ也

○人めゝつゝゝ　或撥　令婦とゝの外ゝゝゝゝゝ
されてゝ人のゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝて真實よゝむつゝゝゝゝゝゝゝゝ

○いとゝゝひゝう　細　令婦ゝゝゝゝゝゝゝゝ
或撥　源氏の四つきゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

○卯月ゝゝゝ　細　若宮系門ゝゝ
巴撥　友垂と入内也

○あゝまゝきゝて　細　源氏ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

○おゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

○みるひなき 細 たゝひるくらうくゝき人のなさ
るゝちはいつきもあるす物とおもひ給也

○源氏の君と 細源氏と東宮とをいはさう
しるをいはくあるかきり也

○世の人乃 或抄 才一の白とは朱雀院とさしてき
て世上と同心せぬとなれ源氏なり給ふる也此事物
垂巻とあるしる也

○こくうて 或抄 源氏君に下はあるきと

○こうやんるすき 或抄 ききくるる女蛍の巻
くゝは源氏のこうちとあるすやうるる若宮乃

まるすあるべきなるべきなさぬ
はぐるるもひ給るるこそなれ
はしるいぐるるすんりうで
こうぐるるみゝ源氏の君とうぐわ
るるあるはおりうおぐゝ世人の
ゆるするのまぐかるるこうより
て恨もえとゝてまつゝど成
すとおぐどちおしうぐゝは
こうぐはるるさはあるこうちは
ねびておるするとはんぜるす
はこうるるうおぼしめとを
かうるんぐるるさはこうはおぐ

ゆれ給ふるうとは
○きもるるき王と 細 東宮とあかも也
或抄 源氏乃衣りうこきもあるしゞ見ハきと
るゝ也
○宮ハいるるはつもそも 或抄 女蛍ハ此若宮の源
氏と似給ふるといふをみるなるゝあるはつもそ
をむねのあくるるゝ也
○こうるうて 孟 女蛍の巻方りて也
○いてき出すゝせ 或抄 若宮をいつくしうてき
給て出させ給也
○うこをは 細 そこハ源氏とうてのは也
○いとちいさきかとハ 細源氏うてハあるきる人
をまちくゝ又給るるきゆへ小児ハ皆とるる
てやうるとはとあかも也
○いとくゝうつくと 或抄 慈愛の心也俗よいとか
ゝ心とあるす

ひりもそきゝいぞ給ふるまびまぐど
るるさおとおぐゝかけぐくよえハ
いるるるはもそももの源氏
やとかぐ物とおりるとまびの巻
乃こうこるうて給あるびみど
ゝ給よぐぐさいでなまゝ給ふるく
乃こうこちあるまゝあるまでそこを
のこるんかるなぐちゆるまう
こまびおりひとるるゝやわん
いとこうこうおぐえうまぐちい
さきなぐハんおくゝのこるるぐさ
ゝやわんうていぐくうつと

○たゝかゝ　細　世語のつき奇特也　如切　如琢磨
瑟兮僩兮赫兮喧兮　なりいろ文勢也

○うゝくゝよ　或抄　色くゝよ心のうつる也

○わかうるはして　細　若宮の有様也常よりの児の
さま　なり

○さてう　或抄　我と我身をいさうる心

○あるうる也や　巴抄　双地也

○文ハうるうる　或抄　友垂の心也　伊氏よりく似
ぬるとゆ門のあるせうを四よきもあれいる
しくゆひてあせるるうぬる也

おりひやうえ世ぬて　ほねの
うみおりてのいろうるこうち
しておろうるうもどうげかく
もうまてくもおうれるも方ぐ
うろうこうちておうぐおち
めでしのがうるどてうち
うるぬうぐいとゆくうるうさ
よ部勇ぐうこうよ世ぬうん
ハいうぐういうるうぐしぬぐ
わるぐうるるやえいうるかく
うるうるうこうよおせもぐれて
ぐおりまうぼ持ハるかくかる

○我れうるよ　巴抄　二条院うて伊氏の山庄わうるうて
或抄　二条院の東ハ対ゆうし

○あるいとの〳〵と　万水　葵上一山出あんとの有様也

○うきぬうゆうるうし　細　ゆよ地也

○うゝ〳〵て　或抄　伊氏也　万水　ゆてこうゝ〳〵て
うゝ　ゆて　ぬうきうけこうゝとの心也
巴抄　伊氏若宮とうてうるようくさまるる也
花うゝ〳〵ぬうれと　ぬうふうくさまるといるうゝ
きうこうるの花

○花よさうゝ　河　我宮よまるうゝうてこいうゝを

みううのうさうゝやうなれど
まぐぬうひぬうぐ　ぬうこうよう
ぬうくひのやうくうるうさをなぐ
ぐうておいゝなうておうと。伊
おのゆうざいのうなうるうくうき
ううれうるうおうこうゝのうるやう
よきうぐうるとおうせぬて今
梅のうみのうるうさぬうう年
おうううぐ

うゝ〳〵うるうこうるはなく
き梅ぐ　ぬうきうまうるぐこ
のうる　花うううるうんうおひ

花よさかりんとえてはやん
○さかねへき　或抄　よきへろこや　大せ卜也
○とちりハ河　ちりハりハ水斗也されとも
てこの身なれハちりをふたへしとそ也の身ニ
よそへて也　細　一筆ハかりと　命婦をさして
卜詞也
○いは花ひとつ　或抄　撫子の花ひとつ身をとりそ
ハすは源氏より撫子の花ニ文をそへ給ふれハちの
たよりかひかりなき紙のうへニ一筆かきしの心也
○後の御かへし　或抄　常盤の御かたよりさるさき
やうそ物衰ニ思ひ分なれハ返し身をわするハ也
○袖ぬるゝ身　常夏也　細　却思ひのまゝとも也
也抄ともれぬハ暴也とものてよそとハそ可心得
○よろこひなり　或抄　けなりハつ也よろこひつ也
細　命婦のうれしくとそ也
○さいのもれハ　細　例の御かんしのもるまじと返する
とハそゝてまします也

ぬ□のよも　かひりさきふか□ゆゑ　せこ
すしかかりかけさきしゆやうし
もん御かんさま　そてくりかへり
この花ひゝのしきゆかをしまはし
うろつもりのいてわかれぬおかし
ちろしかとそ
袖ぬるゝ露のゆかりとおもへ
みもるをしきあやなきぞ
しそころかのかまさきしろ
やすかるをしらずひかるな□□
さいのさとこれいきまあらが
とうなとそてあつ□へつ　ぬ□ふ

命婦詞
常盤
源氏心

○むねうちさハきて　万水ハしハ返すかするきなきさや
うよおりしめしてろうされ給へハ不慮の御返す
を御らんしてむねさわき給ふ也ろうとしとハ也
よろこひてろうひれてうさま也
○さいのするさふそハ　或抄　常盤以人の思ひ給ふすさ
わまハ世上あうへ又まうり給也
○ちらとをる　或抄　源氏の御也　かひとひよ御れ
しくもなきゆへとりてろうひとし給ハぬ也
弄大輔ハかりときて直衣ときれハぬれやうらき
ハ直衣の下ニきるもの也
○姫君あり給ふ花の　細　世上也あり給ふ花とハ
なをしこ也なをしのきるさきま也
○あひまやう身て　或抄　源氏の御心又云統世
上也といふすうひきゑかりと云末へゆきそたてし

むねうちさハきて　いとゞしく姫
きみもそのこゝおもちぬ。れぐ
うちよもやうちさはさるうち
ときとハさいのさなかそへの人のは
すの身よりわすれくそゆかふ
さしけふくうちつてなにぬれる
ひんがさおきもとうちのさきさ
まそ御をとをとるうゆかをとさひ
姫くのさきぬるとれは御めごみ
あひつるるみのなるをめされる
うちしてかひつぬかれて
うらそれげにりおひかるうへ

○たくしのうとくし　万水　源氏の宿出あて也笛吹
のそきさうしのてやてもてうたはねよちと
うむきたはさ妻也

○きいうとてうむき　細　源氏の久しくとてたを
うたふうさ也

○こちやと　細こちへ也　万水　源氏の紫君よ
こうて人とあうせうて也

○うくあいそ　河　はそはへあういそれまうあや
うくくそくそうくくの多き

○ちあうひ　或拍　神うてはとあうへ也或人手
してあうへうとをいう

○うくあよあくハ　万水あくまてへとうくはようあ
ううあと也　世拍　まうきうきはうあうきと云ふ
あう　河いせのあまれあをうあうくてへ
うくあよへとあくうしてる

○ひうせより　或拍　ことををへ人　源也

○さうのとハ　花筆　秦聲也世謂蒙恬爲笳
有十三象十二月其一以象閏也自一至五大絃と云
自六至十中絃と云自十至巾と大絃とと

やうておつるぐうくものうう
はとあら面うちうとそれぐ
きいるうぐうひうされつうあ
つあうくよついあてこちやとの
はてどおどうどうどうあいその
とうちどどひてうちあひひ
はつうき面ぐうぐうきてううて
源氏物
わふくかうあ中うちうれは
よううあうあうあくいきうき
中ぐうてへううてはとうう
ゆてひをうてまうはきの
てうは中のやうとれうへうきた

以中のうをとハ巾也平調の時八二七爲の絃官そて
巾は絃ハ下無調よりうと云也　乖巾は絃うて
細絃うりは細き心也中のこれうとうう類うや
○平調よりうて　河　平調ハ筆の柱とうをてた
つうり　拍乖委
○うきあうをせう　万水調よりとうへうう妻をいう
○ううんしも　孟　ううもうてあと也

○いしはは　河由　万水　左の手うて琴のうをを
ををうという　或拍　未の巻よゆのねという

○一ちうう　万水一巻うてうひうう拍也

○あうひうう　細ううひうへうとは也　或拍　芳垂よ好うへうをねひはうう叶也
○かうろうせう　河　長保樂　破　保曽呂倶世利
急　賀利夜須　或拍　樂よりて序破急を

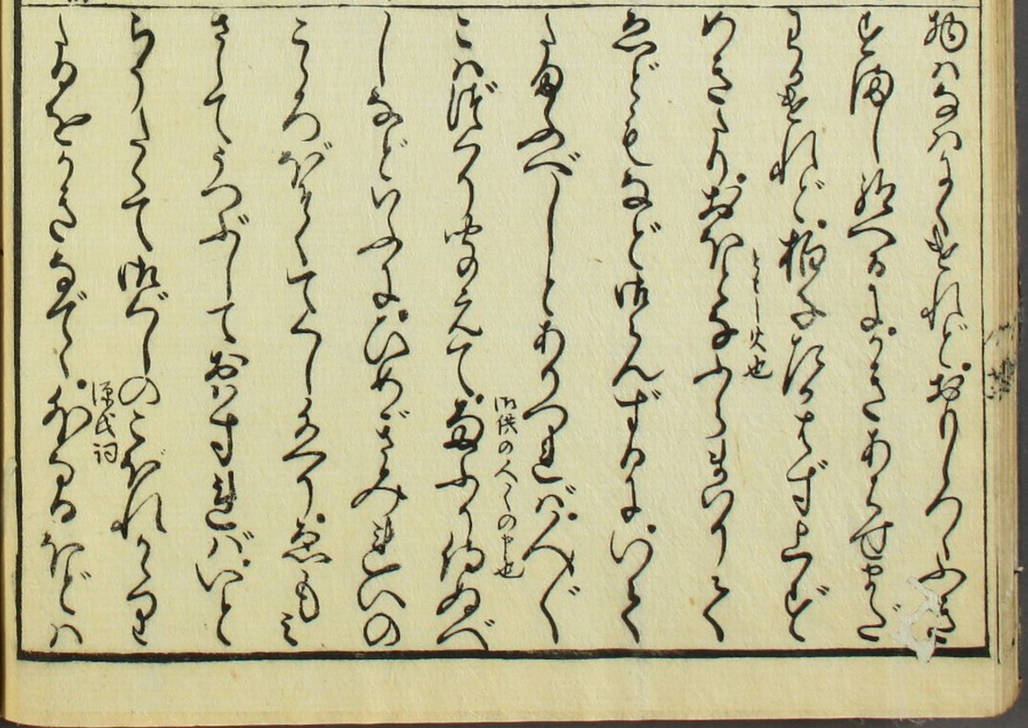
もうつ下もれとて年期ふをう
ぐうてうてうぐはうきあうを斗
ひうてうやははうまぐはえうへ
もうてどううてうう月はうはうき
はやぐうようやうてゆははは
てうきいてううてうれはうう
とはぐうて楽なうてうとへ
はいはうきうてううきううきは
をぐうひうはうはうはうひうう
はははうきううぐうくはうき
はうきうぐへをおうひうてうう
とはぐはとはううをうをいふ

三つのうちて別とよ名を付てるるある也名をふまれとハやさしき名をそしるき曲と也
巴撥 笛の曲うや伯一説調示也平調よあ〜を
名をうてき調ととあるる也くのとを心得て
たうるくきを

○出ぶしと 細源氏こうひいとうう源ぶうきき新也
盃 源氏のうるくく也
○くく 或撥源氏に供のくく也

○ひの君例の 或撥 源氏のおうくまうさねとき八
くう源くまくくまいり 屈宅

○外ゐうかと八 或撥 源氏の余所よおうくまうは
八源氏をこひくくいうう源くく也

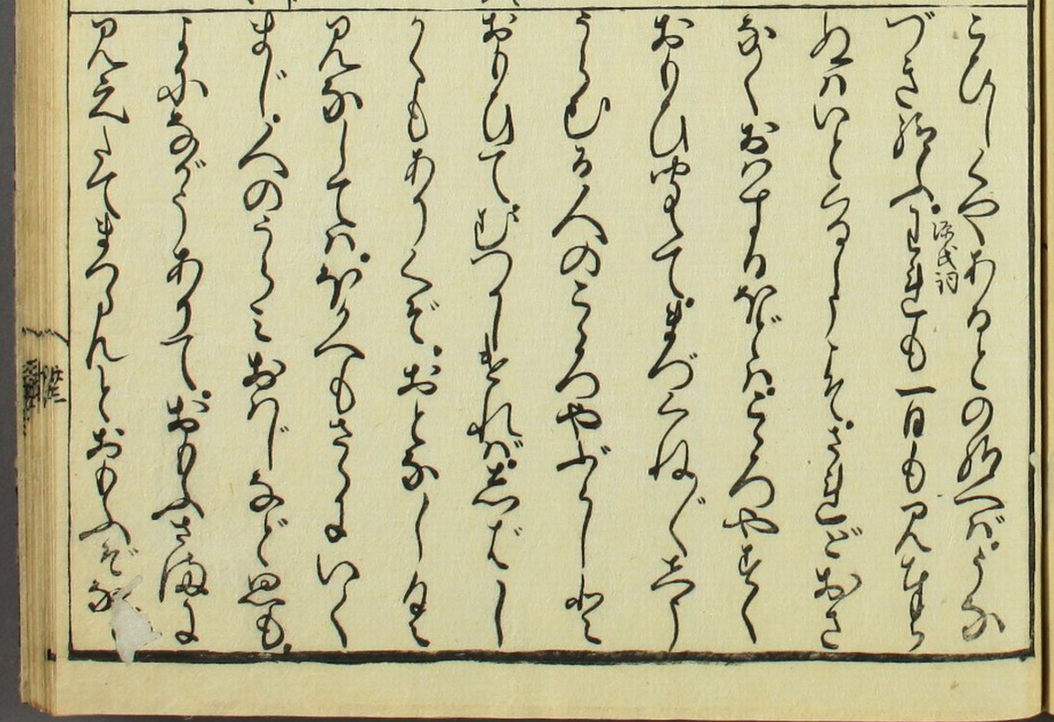


○うるうき源 或撥 紫上逝去をハ源氏をさやう
ゑゑいてんうるうき源也
○うれを一日を 花 詩云一日不見如三月云々

○まろうねしう 原くまろくくのうをいう

○ひつくきれ八 或撥 人ようくくくくひつくさ
ようくくれねやうるありき源と也 紫上ゆる
しくるう源くく八外ゐうくきと与源りくと也

○人の恨なくくと 或撥 人の恨をなひて八長命
よるうさりのくと也長命くと与源と紫上よ長く
そひ源くんくの四くと也



○さもふるつてて　或抄　源氏の山里あるとき
ひかるのうへのおもをうつしたる也
まつさかりなる也

○こよひは山とも　或抄　源氏こゝろひは外山ある
ーきこゝ也　紫上をゐてそうて也

○皆うちて　或抄　山供の人くうつる也

○ものゝ　万水　内膳也　朱の剋り西の剋へ
まゐるをこゝろといつり
或抄　西の剋うて山膳をまゐる也

○とうをよ　万水　紫上のたうくしきこゝ
ろ也

○さはれひねもす　細　紫上の羽也　行こゝ
さようくの所也　或抄　一説紫上の心也　こゝひは出給
なとゆへはねもすとゐたまふ也

こゝ海でとかこひやすらはせ給ふ
ゐるとづてうてもくもて
まをれば　やそ海ひさよりわ
かるとてねうはるまいとん　源氏心
ゐるうてこゝひはいでどるり
めしのあつかふらておものの
みどころまつ也　うり姫
ゐうしもうていそどゐうみと
ゆのえはべるぐさておとはへ
つりうつりよはあがきらと
ゐうげよとひてこゝはは
ねーしとあやうどようひはべ　まつ出やうんしも也

○ゐうき乃ち　万水　後の世乃道のうとゝう
細　源氏の月也　或抄　源氏の心也

○ゐかいものよ　万水　紫君の葵上をゐ（源氏の思
わんとしはをとゝひくとあはるゐ口さうもく
人のつをしうゐとも也

○やさまうき　或抄　俗よ乃てうもうきとゝ同
紫上と源氏の仲の安さ人くしはは人はまうて
ふるの人は誰ともうわ也

○さやうよまつり　巴抄　源氏とゝめうのとゐ
ちうくきへうて人はわしとも也

うゐとんとてゐいとでさ
なりどもおのむしさうくゐ
しあふうやうよでうくもは
やりくみどもおほうとどの
かうりゆ人おほいのよゆえ
葵上の御方ゝ　ゐくの上也
をれはられるんいとわざ海ーさ
ともあるうかい海でれの人
ともゆのえどきやうよまつい
うはづきるでとうんはあてやう
よとうわよくさ人よあうで
うちとうわるでうそでとうかく
乃ん海ひもんんとものう

○いとをて　河　驚駭　日本記
或抄　いとをとは　をとるやうなる心也
細おさなくて也　やうはかなくいとをなる人をいふ
こうてさてさてもなる人をとりし　美好とてこうろ
○うちうと　細　禁裏ゐる也

○たとへ乃　細　参上の父大臣　をきなる
又人のおもかわり　也
○をとめをとりし　万水　源氏十二歳より　おとこの
又をとこの心也
○おかなく　万水　大臣の源氏とわつらひ　とも思
たりれんこうろる心
○さハりのう　細　くやうれ不と　分別　をもう
程　をそいなる　さとも　也　源氏　教訓の心　和也

○うこまりうろ　万水　源氏の心　さ　也
或抄　源氏のとをれる　所をそれ　返答　をもれ
ハさそハうてんなる　もよとせうしよ　思　也

おそ　ごうやとごうんとうろ　ハ
なりうろうるげよいをもてゆ
ゆハうるでさてあひとぐもよえ
あて・内よもかうろ人ありとよ　参上の女房ども也
ていおーくおとのおりひるげ　山門の源氏よの　所也
うかうろものどよあどうり
などをおうるくーくりのーうろ
ーうをさどりのとたどーぬ
などよあーどをおどーはあ
りてるうらんとのおうるれど
かこまうーうさ毋まて出てーも
やうえおうてひだーうゆあよあり

○さうハをきしう　細　山門の心也
万水　禁中よりある好色　女房　也
又ーくのくーくうくてなりとあーとりくのく
うと源氏ハ　をきこーめをるハうきとと不
審ーおこ心也　或抄　源氏の好色　又ハ　ハをや也
○こうをとうるきの　或抄　山房くの女房達也

○うろくくうと　或抄　如此　花大臣　参上
ようーくーれおどと也
○のおハを　或抄　源氏よむいてのおてハう
ーうやうよおかせれうろ也
○やーくのーくハ　万水　天よの山　年ハいをとと　好色
ーくハをておハうと也　是　まよ地の判也
○うねめうくハ　花　朱女　藏人　ハこてよるをいれと
ーくくハーくよめうーくわうーうる女官也　花委曲也
細　典侍　掌侍ハーくよ及ハーうる也

○うーある官ーうくハ　或抄　山門の山　家　愛ある中く
ーうろ　べき官女多くあう時と也

といとおーくおびーうとおーうろハ
をれぐーうーうろーうれてーうの
ーくーうくてなりとあーとりくのく
うと源氏ハ　をきこーめをるハうきとと不
審ーおこ心也　或抄　源氏の好色　又ハ　ハをや也
○こうをとうるきの　或抄　山房くの女房達也

○うろくくうと　或抄　如此　花大臣　参上
ようーくーれおどと也
○のおハを　或抄　源氏よむいてのおてハう
ーうやうよおかせれうろ也
○やーくのーくハ　万水　天よの山　年ハいをとと　好色
ーくハをておハうと也　是　まよ地の判也
○うねめうくハ　花　朱女　藏人　ハこてよるをいれと
ーくくハーくよめうーくわうーうる女官也　花委曲也
細　典侍　掌侍ハーくよ及ハーうる也

○うーある官ーうくハ　或抄　山門の山　家　愛ある中く
ーうろ　べき官女多くあう時と也

○くるまさうとと　万水　源氏の所様舞の批判に侍也
自然源氏のいひよう詞人はさしのをとをとろくべ
きことの心也

○めるてこやわん　万水　光は源氏に目うれ詞くく
の心をいて源氏やうれ詞ゆへ好色の心ア詞
なはあやきするとて心アよたくみわるを源
氏へアくれいくくくみかとよいへ詞て真實よ
アくれ詞とねとくくのさうしくにてあるを也

○さうくくと　万水　孟うまて草子地也源氏の實
目は面よりて下はをさ詞すり第末巻はアくくう
さうくくしとは無曲とのるを也

○年はて老う　細　光とう源内侍のもとと云也
物語の狂言はくく也

○人とをんするく　或抄　源内侍種姓といやう
ふ心くをもきうくきんしを也あてこは貴字也

○うるさこは　細好色のさこは物をうさう也

○さてこもくろまそ　河　さてこは央の字也央とは
とうひ也百年の半と云心也五十余許の事也
又貞年と云也　万水　やうは年とうまて伊
とて其道は心のアくるんと源氏の思詞也

○いとうう物かて　孟　年とうまてアくるこのを
源氏乃不審は思詞也

○うをるくを　万水　源氏のたくみをるをも
うつんとも内侍は物とはねと年のかをを
ととるこうや

○ねるとの詞ひ　或抄　うとてこひ詞こうて
ごとくくしきをとつくくは也

○つとうてはて　或抄　外字をはかめて
とをくくしきをとつくくは也

○れもこうくく　万水　内侍のとをれ門の詞こを
もこうを也

○うるさこは　細好色のさこは物をうさう也

○さてこもくろまそ　河　さてこは央の字也央とは
とうひ也百年の半と云心也五十余許の事也
又貞年と云也　万水　やうは年とうまて伊
とて其道は心のアくるんと源氏の思詞也

○いとうう物かて　孟　年とうまてアくるこのを
源氏乃不審は思詞也

○うをるくを　万水　源氏のたくみをるをも
うつんとも内侍は物とはねと年のかをを
ととるこうや

○ねるとの詞ひ　或抄　うとてこひ詞こうて
ごとくくしきをとつくくは也

○つとうてはて　或抄　外字をはかめて
とをくくしきをとつくくは也

○れもこうくく　万水　内侍のとをれ門の詞こを
もこうを也

○みうちきの人 或抄 河海花鳥弄花細流等の諸抄説〻不同也 河海抄の一説ニ御装束奉仕する人也と云 此義耳に近し仍載之

○又人もなくて 万水内門の御さうしハ内侍し果てさそ御くしきの人めしておはしまさむとハ天子出させ給ひて内侍ハかりおはて人もなきを云也

○さうぞくありさま 或抄 内侍かいかにもわかやかにさうぞくしてゐたるさま也

○さもふりがたう 或抄 心のうちに思ひけるよと源氏の御心にハかやうにも見給ひしとなり

○ものすそを 或抄 裳のすそ也

○かハほり 河 蝙蝠をかたどりて扇をつくり始むる也仍夏扇の異名也 巴抄 女の扇にハつまどりて扇とよハ云也 又顔をかくさん用なるへし 其ハかハ随侍に随てゑかきたる枚目の扇とも用也内侍

○見かへりたる 或抄 目もとゆかしやうにハあれと年よりて扇さしかくしたる也

はてにければうへハみうちきの人めし
て いでさせ給ぬるほど
に又人もなくてこのないしつねよ
りもきよげにやうだいかしらつき
なまめきてさうぞくありさまいと
はなやかにこのましげにみゆるを
さもふりがたうもと心づきなく
見給ものからいかゞとおぼすらん
とさすがにすぐしがたくてものすそ
をひきおどろかし給へればかハほり
のえならずゑがきたるをさしかくして
見かへりたるまみいたう見のべたれど

ふかゝり也 孟子云 とかく見やる心也

○まかハいたく 河 師説云 眶或ニカフラ 文選云 高眶ニカフラタカク 一説眼皮也 遊仙窟 眼皮瞯 今案 眼皮も有其謂乎 老者なれハとてまふたのあたりいろまかハいよくくろくなるへき也 其時細との字清濁両義也清時ハ目皮也此義可然乎

○ほれ〳〵しき 河 扇さしかくしたるのかほをいふ

○こだかきもりのゑを 花 拾遺集人の扇に大あらきのもりかきて侍りけるにかゝれ侍れハ其くれハこうもまふするうへ大あらきの森の下草よしといへるとよめるや

○かたつかたに 万かくてハ内侍の老筆にて書とりたる也 大あらきの森の下草おいぬれハ駒もすさめずかる人もなし 巴抄 老ぬれハ人もさしよらぬ心にいへるや源氏其後無音とかへる也

○森こそ夏の 河 ひまもなくしげりにけりな大あらきの森こそ夏のかげはしるけれ 弄 河海が心ハわかやかなるを見ゆるよしに其詞あり 如何 巴抄 永正十九彰説内侍わかきかへらかハえも心なやかなる人なりと

目かハいたくくろみおちいりていみじう
はつれそゝけたりにつかハしから
ぬあふぎのさまかなと見給て
わがもたまへるにさしかへて見給へバ
あかきかみのうつるばかり色ふかき
にこだかきもりのゑをぬりかくし
たりかたつかたにてハいとさだすぎた
れどよしなからず森の下草
老ぬればなどかきすさびたるを
こともあれうたてのこゝろばへ
やとゑまれながらもりこそなつの
とみゆめるとてなにくれとのたまふも似

あかとさもわれハいまするへのおもひみハと也
○女八さもあつても　細川内侍好色の人なれハ人ゟ
ともに行くハさる也
○君しこハ云　源内侍也　花　我門の一村もさきうか
ん君かたるれの歌もこゑか小町男のこゝろもあれ
よめるとあり　今案大和さき乃森の下草に駒を
すさめぬよしるせり源内侍のもとをれ扇にも
森の下草おひぬれハとも駒もすさめすかりてかりつ
くもなき侍るか
○さてこそハ云　源氏也　花　蜻蛉日記さてこそ六
あれてまきぬるふれの駒かへれかへる森の下へ
今案駒かへるハ源内侍のもとをのかさる男を
かへる心によそへ侍り
○さりてさま　或抄　まへの云れ人やとかくの心也
人のとかくするさりつさふ立より給ひもと也
○ひくて　或抄　神るゝをひくへする也
○まさこるわとそて　花　万四　しろたへにさつさま
しろむ行つまてまさこいとかる物ハ行も　坂上女郎
細　源氏のとくよつきかるきへとハ見るふと也
孟　内侍此年まるれとも恥といまてなかぬと也
○いまきてらん　細　後にもえきこえん今ハ人やも
ありとて源氏乃立給也

ぐんや兄つあんとくえしこすと
女八さもらひかず
君しこかるれの駒よ刈かへん
さかりをだちしたなすりとも
とうすかこよふくらんかなかさう
さうもけがんやとがうんいやぶく
こゐかほくめらりの末がくれ
まづりさまそてこち立てき
ひくてずごかわあとれ思ひ　源内侍詞
侍かね風さつかる身のさかなも
らんとしてまく逢ひていかで　源氏詞　今
ゆのえん折りひまかりやとそて

○引きるかちて　或抄　ひくさる形を引るからて也
○せめて乃山そ　万水　内侍ゟ乃てるひつきさる夜也
○そう柱と　河　侍の国乃うたれ橋の乙し柱かなめか男
るそうまるらまれ
○人ハ流ちちきそて　或抄　河海抄の一説相叶と
まへよきる侍るぬれ装束めしそそうすへて
○まうちりかる　或抄　源氏と内侍とハ不似合と也
○まき心すとて　或抄　此門此詞也源氏のあまり
寶ときこうと思えるま内侍をさへ見ささねよ
との詠されての歌ともうすく如かせよし也内侍う
の歌との義ハあまりてあて　云々
○内侍ハるすまてる中　或抄　此門のまるとせ歌とほ
てるまよくうつしき也
○きなるぬ人　河　こくうるみへ乃きをめかねきあい
知りひよめへと今うハうらん
或抄　源氏ゆへハさき名をもうちてとて
ゆしてなきなるとあつねハさてうすとも不隙也

よるらてらぞ詠とせめてし乞よび　内門
て橋ぐちしとくらしるとへ
いさちるとそんそて此辞まより
のがり世なかうずよう見しかね　此門此心
あまひるそでとおうしくわが
されてをききびごしろかなしと言
よりそろやむあとさいらへど
るそざつるさらかいとそてぐらうそ世
なつがまうしいな風まゝぬめ忘れ
どうくら人ゆへめとがぎ　内侍心
をだにき風かしるたびも
あるれがまやいさくれおうび

○人〳〵ものゝ小 或抄 源氏の内侍なとゝ云れたる
をものゝかゝるゝとあつらひまよとゝ也

○ひてゝぬくあるき 弄 左中將の好色は心てゆゝ
しくいてゝゝひつてゝ也

○まゝこものゝゝまゝ 或抄 我ハものゝゝさゝゝ
源氏ハゝてゝひ給よと也内侍ゝ年ゝゝゝ
の心れつきさねとゆゝ〳〵ものゝて也

○此君と人〳〵ハ 万水 内侍の心也此君とハ左中將のす
也常のゝゝハゝとなゝ也

○あつきるき人乃 細 源氏のすゝきゝゝゝ也

○ゝゝゝかゝきハ 万水 左中將ゝゝゝとゝを源氏を
ゝゝゝゝゝゝゝゝ也 河ゝゝゝゝゝゝゝハきゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝ

○おうこうの　水源氏よわ　とも　ろうそくし

○うつろうよ　河　山城のこものうらぬうつろうや
良以之祭也左伊之祭やいうぜんくれいうよぜん
うりやもるのうつろうもてよや良以之ものやう
ろうもてよ　催馬楽呂　山城三段
巴御いうぜんくの用ようこうもてうそひぜん
ろうハ瓜作のいやーきものうるは成てうーもと
とうぜんとうこうもて瓜の時分也
○うくもうよあうぜん　細　河内本文君といひぜん貴の
人とあり花鳥ハ河海の説いうとあり青表紙ハうーう
と有ハ可然也夜聞歌者宿鄂州詩也花鳥ハ嬪
婢十七八と云々よりうてうよハ不似合と也然共今ハ
うーうーうをうーうーうーうのをきて當意そ
うもの歟　白氏文集第十夜聞歌者宿鄂州　夜泊鵰鶚別
江秋月澄徹　隣船有歌者發調堪悲絶歌罷繼絃絃
泣聲通復咽　尋聲見其人有婦顏如雪　独倚船檣立
嬪婢十七八　夜渡似真珠双々墮明月　下略
○君あつまやと　河　あつまやのまやぬあまりの雨をきぬ
ーうーうをあうの戸ひーぜうをうひと戸さーーあーハ
ぬうそのたうれさめとひひいてきまぜ我やくつま　催馬楽東屋三段

ようどうれべりのうーーうーがぬ
えうろゆうーいとあうんれるゆ。
ゆうもはうーうるうやうるもはー
とーもいとおーーうてうーふ
ぜーもうーーうづうるうーかぐ
ぎうよあうもんむーーのんもかぐ
やゆーーうんとんてとあうて
ゆのあーーやうていてうーーうひ
ぬうびのゆうーうひうーを引やうーう待ときー所也
ぬーれうもうーうひうー。ぬあーぜま
やをゆーびやうーうーひーーう
ぬうーるーよーーーーーひーーーーー

○是もやつれ　き　細　これもやうつてれかりつ
とひ所也

○いつくしまめつち　細　實法とこそ所をえ也
万水　源氏のいつくしまとつるあそこの中將と姫也
のくとそこそこき所也

○つきすてうちく　万水　源氏のつきすくせ好色の
心をきこかもて内と思ひあつきー所をえあくえ
との心也

○是をとろもてつろ　或抄　頭中將心也内侍の局よ
入給ふとろもてうれく也

○たゆめなか　巴抄　源氏をもつあそゆんさせ
ぞうー也頭中心をうんし
河　頭中將ろをうるをたゆめて源氏のねつ
所をまちもちろ也

うまもめつくこそちぞー
うふ・源氏也　ぞのこのつく
まあぐちとどてつひよりど
のあぐねこそつきをつきるて
うちくこのびらあふこそ
あつをいでこあつうんよこ
やりしよちよこをこゆを
ふこちいこうまてかくあ
よすこあどーやこて侍ん
まどうてうあやといんと
思ひてうあやまあうぜひや
うあ侍ゆてやこよのかどよ

○やこつ入ろよ　或抄　頭中將也
○君ハとあそーも　万水　源氏ハちとあそもれ里所也
或抄　源内侍ゆよあそねゆ花鳥のかハれれ所なし
ろとありて藤壺のゆうを思所也ということ

○まつれ　細　俊理太史也内侍をまとれて
せーくうこおかも也　河太史ハ世職の頭也

○あるこつ　万水　源氏帰所ろんと内侍よ也

○こをのうまひハ　河　我せこうくきこのひさこあの
ゆくれはうまひうまてこつー　細世人のくき
事ハうまてもこつくきおもこ也
○とう所也ろ　或抄　賺字也俗よたうもこ
なるーき也　五ーもこつ也

源氏
まどこつひまやこ
きびぶこつ入ろこ
源氏
ゆこ
みハこ
こてこ
ほこ
ほこ
ほ

○おうぎをねんして　孟　ねんしてハうくてを
○こかくくと　或抄　扇ハをてひ考也
○れとろくしう　或抄　頭中將ヨきとをくくし
しる也
○内侍ハねひれと　万水　内侍ハねひれとうをえ
やうくるうくなれハ心うをとくあるくびよ茶よ
をくうよくのやうろうを也

○心あてしさ　或抄　周章　心さいうをうをうを
源氏のをを心りとうくを也
○つをひくくう　巴抄　頭中將を内侍ひくくを也
○くれとをうきて　或抄　源氏とハ俊れ太果よをうを
をてとを也

扇のうをうをうをひあ中將
おうををねんしてハうくてを
扇風のくくふわてくをくくと
くくくをておどろくをうくハ
をおいてねびくれどいくく
うづみをひくくのをくびく
もやくくをうをうをうをあり
あうをれをるくひてをうをくくを
源氏也
あうくくくくくもをのくくをを
しくををえあうをくくをびくく
よ海をうくくくとひくくくれと
源氏
をうをくくくくくををくくを

○うをよ　或抄　後手　うをうをを也
○ひくをこをうくくし　万水　ひくくくうくを也
或抄　をくいをうをうを　孟　嗚呼
○ねをひくくを　或抄　ねひくくハ源氏をくをうを
くをれハねをくくをくくくくくれを　孟　也
○女あう君くと　万水　頭中將ヨ内侍ひくくを
或抄　吾君くと也
○かくく　孟　殆也中將の心也
○このをくう　万水　内侍ひくくをくくをくくをひくを侍
くくあれをきくくをつねくくさハくくをくくをくき
しくの心也
○五十七八の　細音よくを也

ををけるをくをくくくくく

○そこらのまうへ 細そこらのまうどくらむ也
或抄 頭中將のたゝ也但大底といひつる也
○うゝあゝあまよ 万水 頭中將のたゝうるさる也

○たゝ 細源氏ハやうて中將と云ふ也
○たゝこよりわ 河鳴呼 花想こゝしくする心也
あるゝゝしくする心也 或抄 これをとゝるる心
也ゆうき心もあるゝし

○ゝてつゝ 或抄 源氏ハ頭中將と云てゝいるを
ゆゝ云ふ也
○ゝてゝき抱ゝ 或抄 頭中將心也ゝれと云ふゝ
るゝハゝゝをれとをゝうゝき也
○ゝうゝ心 巴抄 現心 徴心 ゝゝゝ心ゝる心
河万ゝゝゝ抱ゝゝ心ゝ我ハゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝれハ古今ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝれゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝの月ゝゝゝの源氏ゝて
おゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝよゝてゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝ

ゆるすなれハつつゝや
或抄 俗ゝゝゝ

○うの花ろうん　孟　二あひ也
○中てい　源氏也　花　石川のこまうとよあひを
とりてそうきくおもろいうる事う花田の事れ
ゆうハ絶てう催馬楽呂石川　中将の事へまといこき
二あひいるれとも今ハ花田の事とけきうえ今ア
行うえハ石川のこまうとよわとうくゆへのう
ておもて行う　花上下略　巴撥　内侍と頭中将との中絶
うとれんと事と為て好也
○君よりく　頭中将逢方也　万水　内侍と我との
中てハ源氏の事を引とう好ひ　ひのて源氏をうと
ちりさんとの心也
○えのわさ　或撥　源氏の引とう好て我中ハ絶てハ
うとうをえのれ好ーと也
○てとうう　万水　源氏の好き方也
○大やをす　花　以中将貫首うよりて宣旨ハ
とうをうきを好ろとう也　細ろしくさ共上へ
奏聞ところと下へいひうさとと也
○てとうう　万水　源氏ー頭中将もうーよ好ると

そのうのうきよつてて
中絶ハ　やおとあやうさ
よしるぞこの事ハうてくにこば
（そーてて逢ものと好也）
やう好ろう
きうよかくひきうもとあろ事
なれハうてうあろ中とうこん
えのうきさ也好ーとわう。月け
てをのく廃とうまうう好ーいと
しづうよ絶どとさ海ておうす
うよ絶のうきもいとおうーをまど
やをとど絶かくうしうーで
見ていとうろうくをうろう

心よハ上ひなういうのとくとうろさ絶をー好と也
○人まう　孟　以中将源氏ハうう人也
○いとわうをうう　或撥　以中将の弁と地うう也
○立なう得ぜん　万水　中将てそて詞也
○まうとハうしや世中　花　古今の初可有可尋
乗ハ今の人をとう初うてー世中を観ー
ううてを可然う
○とうの山うう　河　官途従恐長絶世事身今
口本言　文集　いぬうんのとうハ山うういさや川いさ
とうう人て我名りーとう古今
○うをとれい　細　ひうをうう一ー好也
○うく初ひつうき　万水　内侍ゆへと源氏の長好ん
と也此をうー例の批判也
○世ハ行て　万水　内侍ハ源氏を招ーと也

（たひうう也）
（弁中将ハ）
（源氏ハ）
をとうろもうくてうよ好ろ。
人うよさーううてものがーを
うとと好ぬんうそいとぬうげ
うとあうう。おそうさーもあん。
ううかうう海りぜん人うそいと
好をまとまとうーや世の中よ
とうひあうを世て。とうの海なうと
ううよううかうひさそうのうう
いううすまび事の好ぬでーよ。
いひひうあうくうひなうをいで
初ひつうき人ゆへとおがーうう
色ー世いうをといとえんよ恨

○ひとくさとの君　細　葵上也

○花とくさ花　自然の附落る種よせんと云心也
万水　葵上の門代うるとも中将へうつり移て自然
の時源氏をねどころんとの心也
或抄　落をねどと云説也

○やんするき　細　此已下ゆうさてすんといつまてハ
草子地也

○人のけりてうす　或抄　源氏をハ大切うりてを
ねるといつり

○さりきてこそ　何不とうる也

○中将ハ細　さわく源氏よハ所と寄ぬくとを
この中将ハさとをうきを也　或抄　いさくうのうるを
源氏よりもをもしきの心ある也

○いとんきこえ　万水　わるくひねくの心也

○君ひとりう　巴抄　葵上と以中将と一腹也

○此門のうんこと　万水　源氏のうを也以中将とれかと
とるう大臣のうをてとよ母宮ハ此門のれを校な

うるとうるひとりひとりあるとき
源氏中将ハいとくのこのみをもうる
いでどどこでうるづきうのおどく
ぎるよ五人ぐらひるるやむごとなき
御ぐぐうをこちぐにくへうう
けりてあるのこのうるきよりづて
ぐうてひとこよさうるをくうを
この中将ハこうをもれやんえ
じとうるうこことよはもても
思ひいでこやんえ　このこのみ
ひうで嘆きの御ひとつうり
うる御ことうんごとうぐうをて

ゆきこのおのおのおのおのとうるうるうる
ゆきこのおのおのとうるうるうる
まてみるくうづるこうハるに
ぐうるうるうるうるうるうるうる
とあるうるうるうるうるうるうる
うるうるうるうるうるうるうる
ぐうるうるのひてるにるもあるうる
まるうるうるひてるのうるうる
ひうるこの中ごるのいるこうる
あるうるうるうるうるうるうる
うんうるうるうるうるうるうる
源氏のうるみ宰相のうるうるひる
御門のうるるうるうんの御うる

○ハ　おとろまりきこえ也

○たとうへきこえ　巴抄　おとろまりきと無差別とひ
おとろまりへし
○人うを　万水　頭中将の事也様躰とちうへうと
とのひうろうこうひうへうと也源氏うをさてを
ううねかとのへといつり

○ハ中ととの　万水　例の業式アう行也源氏と頭
中将とのうをひおるハとおりきかとようう
さてうねとの心也

○七月ようう河　左傳後漢書をひきう并神武天皇
踏鞴五十鈴媛を后妃立る事あり河委
細　藤壺女御中宮ゑ立る也河内太十月と有
七月可笠元美故ハ皇太后藤温子昭宣公の御女
寛平九五　中宮ゑ立る昌泰二年七月皇太后
ゑ是ゑ模と書行るうへ　笠者七月可笠也

○れ門ゐんのさせ 或抄 朱雀院より譲位あるべきこころざし
○は若宮と 細 藤壺のれ腹なれの若宮也
或抄 朱雀院即位ましましてゐ立坊あんと云也
○れいぜい 一万水 母方の威勢あるべのゆゑ也
○れ母方ゆゑ 河若宮 冷泉院のれ外舅親王
ゆゑ 右大臣能有之例也 一万水 うよりて源氏ハ親王ゆゑ
の事也 光源氏よりも 或抄 親王の摂政ゆゑ
○母方ゆゑ 或抄 藤壺立后ゆゑ也 后ゆゑ
ゆゑ 或抄 威勢ときくれハ若宮のしろたえ
ゆゑ也

○きさきてんハ細 弘徽殿とき皇そいと皆人の母也
或抄 きさきてんハ后より立べきよりひの外なれハ
弘徽殿れ立腹なと也
○されと 弟宮のれより 一万水 朱雀院れ在位のゆゑ
○うゑひるれ位 或抄 皇太后宮ハ天よれ母の位也
やうて皇太后宮より成ゆへしゆゑ也
孟れ門のきさきてんのれ初也

○は余年 細 二十餘年と音よりも也
孟 ゆゑ也 あるべしとも

○引こしより一万水 きさきてんを引こして藤壺后より
立后しゆゑ也 惣別東宮のれ位よりつき給へハ其れ母
后よりやうて立后ゆゑ也 皇太后宮と也れ孫て
門ゆゑ也 太皇太后宮と也
○例のやうに 一万水 きさきてんゆゑの人也 藤壺をも
ゆゑ心よ常よりせ例と云やうよ引こして后ゆゑ立
ゆゑ也 ゆゑ也 ゆゑ也
○れ 或抄 ゆゑ后のれ也 ゆゑ后ハ
ゆゑ也 ゆゑ也 ゆゑ也 ゆゑ也 ゆゑ也

○れこのうちを 河伊勢物語 二条后のまさ宮の
ゐやとおもとしまろ朝臣神よまうて給ふる近衛司
よきつひまろ物まを 大弓やをかの山さきよりそ
神代のまもひ出わとて心よいるまとやひいん
いくもひきんちをとて 万水山限とくこゝろ心るの
花中宮行啟よ八風輦よめさるまとあり又底の糸毛
の車よのり給ふ也供奉の人ゝ行粧もの物ものこ
てうるる行る也
○つきしぜね方 源氏独吟也 細 心のやゝ八若宮也
雲井よゝとい藤重也

○ひとりこんて 或抄 ひとひのもまうてひとりとの
いるる也

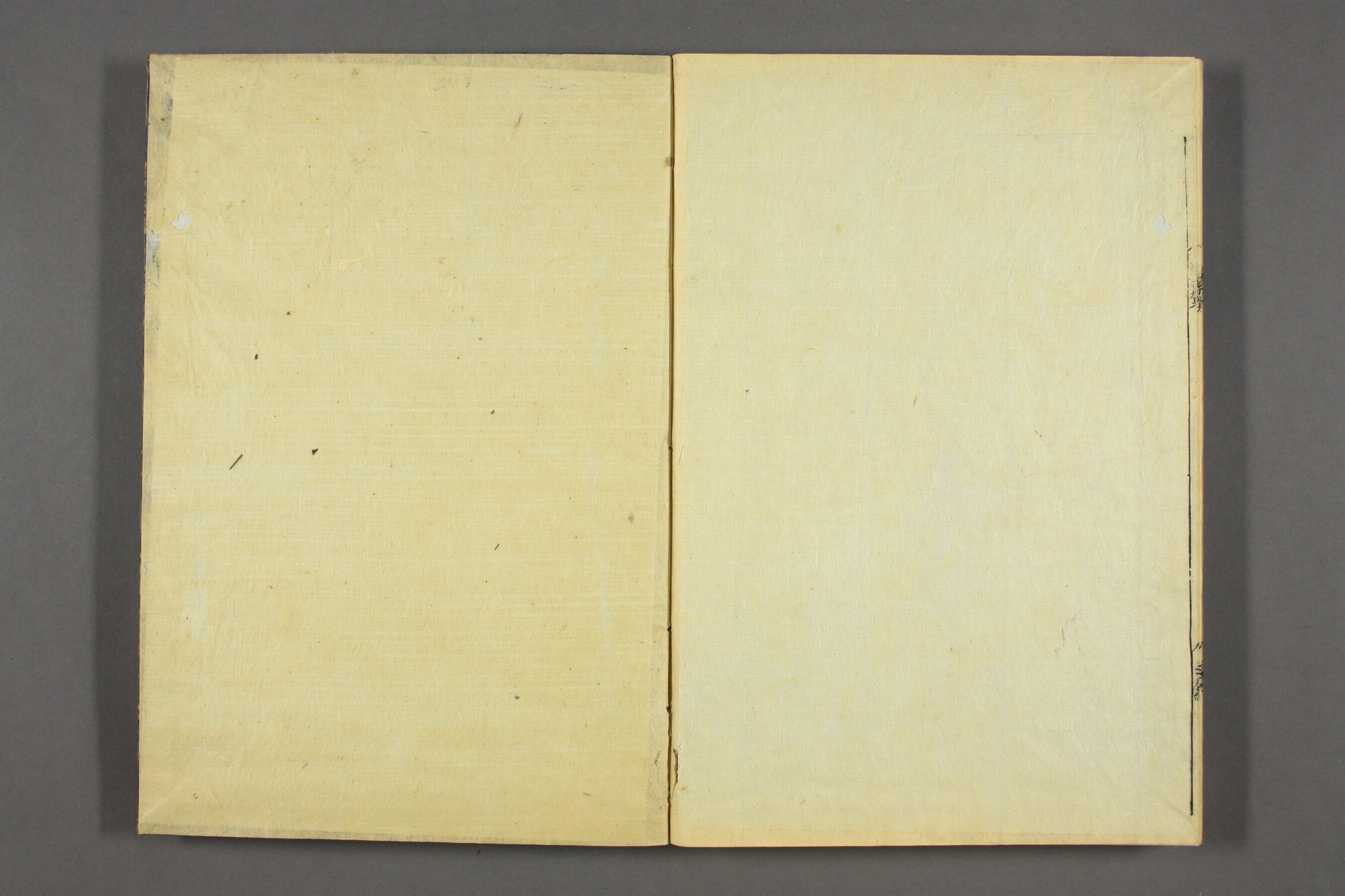
○ゐんをうまさるを 或抄 ゐもとを源氏とを若宮と
をゐんをつきかゝ似給ふること
○ゐいとろ 細 源氏よ此宮の似給ふる也

○をよいるる宮よ 或抄 草子地也うちとるまゝとや
源氏と似給ふやうるゝ不しとを也源氏のうちひとを外

とるのうち所ゐんよ所ゐんのうち
うちもやりひやらをていぐ乃び
まをこゝろ〳〵ゐんよおそぐつて
ひとりいるる也
つきもせぬんのやとよりおるる
をゐるよゝとんらよ海をてもと
ぐびるるをやいとうるゝ宮ぐ
世ぐ皆ひとりるをさなの物り
りぐよいるゐるよ海くりあつて

よハいるやうよつるゝ〳〵ゐるをとくハあるしと也さる後
て源氏よ似給ふるとをゐんとゐるりのゐるゝと也
○月日のひるゝ 万水 源氏と若宮とハさるゝ月
と日とのひるゝよ似るやうるゝと世中の人ゝひ
なるゝと也
孟月日の光汗水をゐるゝ〳〵ゐるゝの月日よたるハゐゝと
冷泉院と源氏との似給ふと諸人ゐ也

ハゐるゝゐ也ゐるゝ海ぐるゝ海ぐるゝ
あ給ふまゝ月日のひるゝの
ゐるゝひるゝやうゐぐるゝ人も
ゐるゝ



4